

ライフサポートひなた 通所リハ

症例概要 利用者：60代・男性・要介護5

病名：左被殻出血

既往歴：COVID-19

経過：2024年7月群馬で旅行中に脳室穿破を伴う左被殻出血を発症、同日開頭血腫除去術を施行。その後、医療センターへ転院（経口摂取困難でPEG造設）→竹川病院に転院。12月にコロナ感染。廃用が進みPEG抜去目的で2025年1月にA病院に再転院。2月にPEG抜去、5月にリハ目的でB病院に転院。8月に自宅退院。その後、ひなた通所利用開始。

内 容

60代男性。脳血管疾患の後遺症により片麻痺と重度失語を呈し、運動機能や生活範囲に大きな制限がある状態で退院されました。移動は車椅子が中心で、意思疎通にも困難があり、ご本人・ご家族ともに退院後の在宅生活に強い不安を抱えていました。

そのような状況の中でも、ご本人は言葉で思いを十分に表出できないながら、常に真摯にリハビリに向き合い、強い意欲を持ち続けていました。理学療法、言語聴覚療法に加え、他事業所での通所・訪問リハビリにも前向きに取り組まれ、ご家族もその思いを受け止めながら、日々の支援に協力してくださいました。

こうしたご本人の努力と、ご家族、多職種の支えが積み重なった結果、施設内の移動は車椅子中心から歩行中心へと変化しました。杖歩行も見守りで可能となり、さらに屋外歩行や独歩に向けた練習にもつながるなど、生活の幅は着実に広がっていきました。更衣や装具の着脱動作の獲得、トイレの意思表示も徐々に可能となり、日常生活動作の自立度も大きく向上しています。

中でも最も印象的だったのは、新幹線を利用して山口県にお住まいのご親族のもとへ外出するという目標を実現されたことです。

車椅子中心で生活範囲が限られていた状態から、「大切な人に会いに行く」という願いを叶えられたことは、単なる身体機能の回復ではありませんでした。それは、ご本人が再び社会とつながり、自分らしい人生を取り戻していく、大きな一歩となりました。

重度失語により言葉で気持ちを表すことは難しくても、リハビリ場面や日常生活の中で見せてくださる表情や行動からは、達成感や喜び、そして次の目標に向かう意欲が確かに伝わってきます。そのひたむきな姿は、ご家族に安心と希望をもたらすだけでなく、私たち支援者にとっても介護・リハビリの意義を改めて実感させてくれるものでした。

私たちは、ご本人の「できるようになりたい」「行きたい」「会いたい」という思いを中心に据え、多職種とご家族が一丸となって支援を続けてきました。

その結果として実現した今回の外出は、“その人らしい生活を取り戻す介護”の力を形にした出来事であったと感じています。

現在も、ご本人は歩行での生活獲得と、より質の高い生活の実現を目指してリハビリに励まれています。今後も私たちは、ご本人の思いに寄り添いながら、多職種・ご家族と連携し、その人らしい人生の実現を支えてまいります。